

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第2回

人質が見たアフガニスタンの裏側

常岡浩介（ジャーナリスト）

11月8日に、グローバル・スタディーズ研究科主催「グローバル・ジャスティス」第2回セミナーに、講師としてジャーナリストの常岡浩介氏をお迎えした。常岡氏は、イラク、アフガニスタン、チェチェン、エチオピアなどで、取材活動を続けておられるフリージャーナリストである。今回のセミナーでは、常岡氏がアフガニスタンで拘束された経験から、現在のアフガニスタンの状況について「人質が見たアフガニスタンの裏側」というタイトルでお話いただいた。2010年4月1日から157日間にわたる長期の拘束生活の中で、常岡氏が見たのは、カルザイ政権の腐敗とアメリカの対テロ戦争の崩壊であった。

まず、常岡氏はカルザイ政権の内側の勢力構図を明らかにしながら、自身が人質として拘束された経験を語った。常岡氏は、4月1日にラティーフ司令官率いるヒズビ・イスラミ（イスラム党）という勢力によって拘束されたのだと言う。ヒズビ・イスラミとはカルザイ政権の3分の1を占める、反米、反タリバンを掲げる勢力である。親米、反タリバンで知られるカルザイ政権の中で、権力を掌握しながら意見を異にするヒズビ・イスラミの存在は、カルザイ政権を非常に不安定なものにしている。常岡氏は、そのヒズビ・イスラミの政略的パフォーマンスの渦中で誘拐されたと述べられた。

「アメリカの対テロ戦争は内側から崩壊している」と常岡氏は語った。ビンラディン氏率いるアルカイダの勢力を一掃するために始まった対テロ戦争は今や、アフガニスタンにおける対タリバンの戦いと化している。アルカイダとの対立は、対タリバン色が強い現在においても、周辺地域の他のアルカイダ勢力の介入につながり、新たな混乱をよんでいる。その中で、タリバンは、「異教徒」アメリカという侵略者と戦う英雄として民衆の支持を得、大幅にその支配地域を拡大している。アメリカの対テロ戦争は、タリバンを制圧するどころか、影響力の増大に貢献したというのが常岡氏の見解である。常岡氏によると、反タリバンを掲げ、昼夜タリバン勢力と戦っているヒズビ・イスラミの兵士たちの中でさえ、その反米感情から、アメリカと戦うタリバンを英雄視する言動が見られたそうだ。

以上のように、常岡氏が見たアフガニスタンの状況は非常に混沌としており、平和構築と国家の再建には程遠いものだと言える。その中で、常岡氏は軍を派遣していない日本だからこそできる支援があることを指摘された。そこで紹介されたのが、民主党の犬塚直史議員が提案していたアフガニスタン和平仲介案である。例えば、アフガニスタンとパキスタンとの国境に非武装地帯を作り、その領域をアフガニスタン全土に徐々に広げて停戦させるという案である。日本がアメリカに対する給油支援を断ち、中立の立場を貫こうとしている今、日本政府がアフガニスタンにできることは何なのか、積極的に私たちも可能性を模索していく必要があると感じた。

文責：地村みゆき（同志社大学大学院アメリカ研究科）